

夏のパリ五輪で 得たものの



パリ五輪イタリア戦 (共同通信社)



Profile

小学2年生からバレーボールを始め、高校時代は春高バレーで活躍し、専修大学入学。2022年、日本代表登録メンバー入り。2023年、中国代表との親善試合で日本代表デビュー。身長200cm、最高到達点360cm。2025年2月、大阪ブルテオンに特別指定選手として入団。

体育会バレーボール部
経営学部3年

か い ま さ と
甲斐優斗さん

バレーボール男子日本代表は、目標のメダルには届かなかった。しかし、パリでの熱戦は日本が世界トップ水準であることを証明した。チーム最年少にして、リリーフサーバーとして重要な局面で活躍した甲斐優斗さんに、パリ五輪を振り返ってもらった。※記事は、昨年10月24日の専修大学スポーツ研究所シンポジウム(44頁)で語られた内容と独自取材を元に構成しています。

——パリ五輪はいかがでしたか。

いろんな大会を経験してますけど、オリンピックが一番楽しかったです。会場が独特の雰囲気、それに慣れるのが大変でしたが…。

——五輪を目指したのいつからですか。

夢の舞台なので、それほど意識することもなかったのですが、2023年のオリンピック予選で先輩方の姿を見ながら、自分も出たいとすごく思うようになりました。

——五輪出場までに一番苦労したことは？

最年少ということで先輩方からポジションを奪うというのは、すごく大変でした。自分が頑張ったというより、周りに支えられて、出場できたと思います。

——五輪での自身のプレーを振り返ると？

与えられた仕事はしっかりできたかなと自分では

思っていて、大舞台でもいつも通りプレーできたというのは自信になりました。

——代表チームには自然に溶け込めましたか。

みんな優しく、年齢の近い選手から年の離れた先輩まで、気を使って声かけてくれ、すごくやりやすかったです。

——準々決勝のイタリア戦ではフルセットの末の逆転負けでした。五輪を通して見えた課題は？

最後の1点取るまで、勝負はわからないというのは身に染みて感じました。日本中から、今までにないくらいの期待がかかりましたが、それを受け止めるだけの準備や慣れも、自分としてもチームとしても必要なかなと思いました。

——代表と大学の部活の両立はいかがでしょう？

大学の部活ではリーグ戦を通していろいろなチャ



↑勝利の瞬間



↑アタックをする竹内選手



↑安定したレシーブでチームを支える水野選手



→決勝会場の千葉県・船橋アリーナに
応援に駆け付けた学生や父母



そして冬、 インカレ優勝 専大が日本一に

レンジができ、自分の成長に繋がられているのかなと思います。

——専修大学への思いは？

オリンピックでは大学全体で応援してもらって、すごく嬉しかったですし、寄せ書きなどもいただき、励みになりました。感謝しています。

——一気に注目される存在になり、戸惑いは？

大会期間中も SNS などを通して応援してもらって、すごくよかったです。自分は本当にマイペースな性格なので、周りに流されることなく、自分の意志を持ってこれからもやり続けられたらいいかなと思います。

——今後の目標は？

パリを経験して、ロサンゼルスを目指したいという思いはより強くなりました。達成できなかったメダル獲得を目指して、また一から頑張っていきたいです。

昨年11月25日～12月1日の全日本バレーボール大学男子選手権大会（インカレ）で、専大バレーボール部は悲願の初優勝を遂げた。個人賞として、甲斐選手が最優秀選手賞とサーブ賞を受賞したほか、井出脩斗選手（経済4）がセッター賞、水野永登選手（商3）がリベロ賞を受賞した。

日本体育大学との決勝戦。開始早々、甲斐選手は3連続スパイクを決め、その実力を見せつけた。そして、今年の専大の強さは「甲斐に周りが刺激を受けて急激に伸びた」と吉岡達仁監督が語るように、決して甲斐選手頼みにはならない総合力にあった。主将の竹内慶多選手（経済4）らを中心に多彩な攻撃を展開。優勝のかかった大一番でもリズムをつかんだ。

セットカウント3-1。大学日本一の栄冠を手にした瞬間、チーム全員で抱き合い喜びを爆発させた。

P15 写真 = 専大スポーツ編集部 山中美琴（文2）